厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）
分担研究報告書

第８章. 滋賀県におけるソーシャルキャピタルを活用した公募型介護予防事業の優良事例に関する研究
～主催者へのインタビューによる情報収集(二次調査)～

研究分担者　角野文彦　滋賀県健康福祉部　次長

【研究要旨】「ソーシャルキャピタル」については、社会の効率性を高めることのできる「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴といわれており、地域保健基盤の構築に重要なものとされている。平成２４年度から滋賀県において実施している介護予防推進交付金事業の実施団体について、調査票による一次調査および一次調査により抽出された優良団体に対するインタビューによる二次調査を行い、ソーシャルキャピタル醸成のための要因を探った。優良事例では、活動が個人の健康づくりや介護予防につながるだけでなく、参加者自らのやりがいや生きがいにまでつながっていた。また、活動を行ううえで、一定の役割分担をしながら、皆が常識や和を重んじて参加することにより、事業がうまく進められていた。ほかに、行政や社会福祉協議会などの関与があったり、連携先を増やすことで、活動の質向上がされていた。さらに、食を通じた活動を行うこともソーシャルキャピタル醸成の要因としてのひとつになることが示唆された。また、大変重要な要因として、個人や団体の「やりたい」という希望やエネルギーが団体を発足させたり、活動を継続させていた。

A．研究目的

「ソーシャルキャピタル」とは、組織や地域社会における「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク」「ご近所の底力」などによる連帯感・まとまり・問題解決力とされている。ソーシャルキャピタルが豊かな地域は、関係者間の信頼感・助け合い等に基づく絆や団結が強い地域であると考えられている。

本調査では、地域の健康や福祉の向上を目指した「地域保健事業や市民活動」の事例を収集し、その事業・活動および運営者・団体の状況とソーシャルキャピタルとの関連性を検証した。それにより、ソーシャルキャピタルが活用または醸成される事業・活動の特徴を明らかにし、地域の健康や福祉の向上を目指した地域保健事業や市民活動におけるソーシャルキャピタルの活用方法を提示することを目的とする。

B．研究方法

研究の対象は、滋賀県で行った介護予防推進交付金に応募し事業を実施した団体とした。この事業は、介護予防に資する活動を行う団体が、県に申請をし、助成金を受けるという内容である。申請をされた団体の事業に対して、県が助成事業として採択し、事業を実施した後、実績報告を行うと

いう流れで事業を実施している。平成２４年度に採択した９８事業の活動内容の内訳については、体操４６、サロン２８、講座・教室１８、その他６という状況であった。

本研究では、一次調査として、活動内容や団体発足の経緯、地域との関係性など団体の基礎情報およびソーシャルキャピタルの醸成に関連する項目について、調査票に基づき、事業担当者が事業の実績報告書等の情報から、各団体の状況を調査票に記載し、点数化することで、上位８事例を優良事例とし、抽出した。

二次調査として、抽出した地域保健事業８例について、一次調査ではわからなかった点（当事者の心情や思いといった認知的なソーシャルキャピタルの変化、困難を乗り越えたウラ話等）を明確にするため、インタビューを実施（６０分程度）し、以下の項目について調査した。

Ａ．発足について基本情報

グループ（団体）の活動がどのように発足したか。始まった時のメンバー構成や活動地域、当時の活動内容等について基本的な情報を把握する。

Ｂ．ソーシャル・キャピタルに関するポイント

信頼、互酬性、規範、連携の４つの項目について、それぞれ　1)今の状況、2)活動を開始する前、活動開始後これまでの状況、3)これまで何か変化があればそのきっかけ、また、4)その後どのような変化をもたらしたか（良かったこと、悪かったことを含めて）、5)悪かった場合（特にソーシャルキャピタルにおいて）どのように克服したか、を聞いた。

信頼と互酬性については、グループ（団体）内と地域（=地域の人びと、地域の他の組織等）との関連性の両方の視点で聞いた。

４つの項目の具体的な質問については、以下のとおり。

１．信頼

Ｑ１．あなたのグループ（団体）のメンバーの関係（性）はいかがですか？お互いにどんな存在のように思っていますか？

Ｑ２．あなたのグループ（団体）と地域の関係性はいかがですか？地域でどのような存在だと認識されていると思いますか？

２．互酬性

Ｑ１．あなたのグループ（団体）のメンバーはお互い助け合う関係にありますか？

Ｑ２．あなたのグループ（団体）は地域と助け合う関係にありますか？支えられていますか？

３．規範

Ｑ１．あなたのグループ（団体）のメンバーが大切に考えていること、大事に考えて（思って）いること、守っていることはありますか？

４．連携

Ｑ１．どのようなグループ（団体）や組織と連携していますか？行政とはいかがですか？また、何か地域の資源を活用したものはありますか？何か地域の資源を活用していますか？

これらの項目について、インタビュー内容をテキスト化し、項目毎に分類し、共通する点や、事例や活動内容による特徴などを分析した。

Ｃ．研究結果

１．全事例の基本情報（表１）

事例 A

平成２０年４月から活動を開始。市の福

祉計画に基づき、学区で地域福祉に取り組むことになった際、たまたま農協の支所が廃止になって払下げを受けたので、自治会で集まる場を作ろうということになり、サロン活動や週に１回の体操教室などの取組を始めた。

事例 B

平成２０年４月から活動を開始。もともと地域で他の活動をしていた人々のなかで、曳山の継承をしようと盛り上がり、発足された。囃市の練習会を月２回行うとともに、年に一度の曳山巡行の際には、地域の高齢者が家の前の道に出てきて、一緒に曳山を引くなど、団体の活動が、地域を活性化させる活動にまでなっている。

事例 C

県のレイカディア大学※1で園芸を学んでいた人たちが集まり、地域の小規模多機能型居宅介護事業所の庭手入れをしていたのが活動の始まり。平成１８年６月に結成され、以来、活動が料理教室やパソコン教室など多分野に広がり、NPO の活動として、地域になじんだ通いの場を運営されている。

事例 D

平成２１年３月より、福祉のことや高齢者に関わる問題について学んでいたメンバーを中心に、発足。中心メンバーは１５名程度であるが、さらに知識を地域に普及させるため、地域に回って勉強会を開催したり、「シニアあんしん手帳」の発行を通じて、地域の高齢者が、安心して生活ができるための啓発活動を行っている。

事例 E

平成１５年４月より、男性メンバーで料理教室やウォーキングのイベントなどを開催。イベントは地域の方にも募集をし、多数の住民が参加されるなど好評を得ている。保健センターが開催した男のセカンドライフ健康講座を受講した男性が中心となって団体を発足させた。

事例 F

平成１９年４月より、市の介護予防事業の委託事業として事業を開始。医療施設や介護保険事業所などをもつ、公益財団法人の事業として事業を実施し、地域の高齢者の集まる場づくりや介護予防教室などを開催している。

事例 G

学区の社会福祉協議会としては昭和４７年から発足と歴史が長いが、平成２４年１１月からは、菊を育てるための材料を高齢者家庭に提供し、花を育てることを通じて、地域のつながりを強化する事業や、健康のための講演会を開催する事業など、地域の高齢化に対する課題に取り組み始めている。

事例 H

平成２４年７月に発足。市の市民交流センターがいきいき百歳体操の指導を行った際、参加された方が地域でも広げたいと区に依頼し、区の取り組みとして週に１回の集まる場づくりとして事業を開始。体操のほか、サロンなどの活動も行っている。

２．信頼について（表１）

Ａ～Ｈの事例においてのインタビュー内容から、「信頼」についての状況は以下のとおり。

活動を通じて色々な話をするうちに、活動の場以外での関係性の構築につながったという発言のあった事例が複数見受けられた。

事例 A では「おしゃべり会で雑談するようになって、よくしゃべれるようになった。」、事例 F では「その場とは違うところで交流のある方もある。サロンの間に休憩

を取り、お茶をしてもらうなかで、いろんな話もされている。」、事例Ｈでは「近所で会った時に、長いこと休んでいるけど、どうしていますか、と声をかけたりすることがある」「将来、ゴミだしなどで助け合おうというような話をしている。」というような発言があり、活動の参加が減った他のメンバーの心配をしたり、活動以外の場においても支えあう関係性になったりと団体の活動を通じて、信頼関係が深まっている様子が伺えた。これらの事例は、いずれも歩いて通える範囲や自転車で通える範囲での活動であった。

３．互酬性について（表１）

「互酬性」について各団体の状況は以下のとおり。

団体のメンバーが他のメンバーを頼りにしている様子が多くうかがえた。

具体的には、事例Ｃでは、活動の取りまとめ役である事務局長に対して、「情報をたくさんもっておられるので頼りにしている。またプレゼンや経理などきっちりやっていただいているからこそ活動ができる。」という発言や、「木工教室を主宰するのに、ものすごく長けた元技術屋さんがいる。」という発言があった。

また、事例Ｄでは、元看護師の会員に対して、「頼れるおかん的な存在です。」という発言がみられた。

さらに、事例Ｅでも、ケーキ教室の指導者に対して、「みんないろんな特技があり、この人はケーキを売るほどの腕前。みんなが教えてもらっている。」などの発言あった。

一方、頼りにされているメンバー側からみると、活動場所がこれまでの経験を生かすことのできる場となっている状況であり、事例Ｅの発言でも「地域の人から喜んでもらえていることを知り、恥ずかしい反面、嬉しく感じる。」などとあるように、その人にとっての生きがいややりがいにつながっていることが読み取れるような発言があった。

また、事例Ｂや事例Ｄでは、「団体の活動が地域の盛り上げ役になっている。地域の人の健康を支援する機会の提供をしている。」など、地域においても活動が認知されている様子や、地域住民から多くの参画を得たり、地域の活性化につながったりしている状況がうかがえる発言があった。

４．規範について（表１）

規範の有無についてそれぞれの団体に問うたところ、事例Ａでは、「愚痴をいわない以外に、決まりごとはない。」、事例Ｃでは「枠にはめられない、自由に」、事例Ｄでは「事業参加は自由で、決まっていることはない。」、事例Ｅでも「行きたいときに行く、自由に。」事例Ｆでは「時間は守るとか、施設を大事に使うとか、当たり前のことだけは守られている。」事例Ｈでは、「自由に、お気楽な感じで。しいて言えば開始時間だけは守る。」など、細かな決まりごとはなく、時間等の社会一般のルールを守るというようなことを、皆が守るということが基本となっていることがわかった。

また、規範について問うた際に、事例Ａでは、「しいて言うなら和を大事にしている。」や、事例Ｅでも、団体の仲間の関係性について、「こだわらないし、和っちゅうか、緩やかなつながりっちゅうか。」という発言があり、事例Ｇにおいても、「やっぱり何事も和やからね。」というように、メンバーのなかで、無意識に、和を大切にしている様子がうかがえた。

一方、事例Ｆにおいて、「すごくお世話好

きの方がおられたりする。そうするとリーダーシップを取り過ぎちゃって、ちょっと気に入らない方も出てきて参加しなくなった人がいる。」や、事例Hにおいて、体調や家の事情により、できる範囲で行ったら良い体操後の掃除について、「掃除もしんと帰らはるとかいう陰口を本人が耳にして、体操に来なくなった人がいる。」という発言があった。

調和を乱すような行動や、人のことを悪く言うなど、規範を守らない行動があった際には、脱退メンバーが出てくるなど、自由な活動なぶん、ささいなことから、トラブルが起き、軌道修正が難しくなることがうかがえた。

また、事例Aでは「お世話役について、当番表などで責任者を決めている。」や、事例Bでは「部長制を引いている。」事例Cでは「担当理事制をしている。」、事例Eでは「連絡委員と会計だけは決めている。」など、活動をする上でのヒト・モノ・カネについて、ある程度責任を持つ人を設けるといったことが各団体でされていた。特に、事業規模の大きいところや事業内容に多様性がある団体については、「会計が重要になる。」というような発言が重複してみられた。

５．連携について（表１）

連携している他のグループや組織についてそれぞれの団体に聞いたところ、すべての団体において「行政」と回答があった。

連携の内容については、事例A，Hにおいては、市の推進する体操を地域で実践している団体であり、その場づくりに対して、「時々指導に来てもらったり、代表者交流会に参加する。」などして、支援を受けていた。

また、事例Bにおいては、「市のバスを借りて、先進地視察にいった。」ということや、事例Cにおいては「施設改修の補助金を活用させてもらった。」、事例Dでは「公共施設の場を活動場所としている。」、事例Eではもとは保健センター職員がメンバーを募っている事例であり、「場所の提供や事業内容の工夫についても助言してもらっている。」、事例Fでも、もとは委託事業から始まっているものであり、「現在は市の広報紙に活動の募集を掲載してもらっている。」、事例Gについては、「協議会のメンバーに行政が入っている。」などというように、場の提供や組織活動支援について、行政が関与していた。

他に、「社会福祉協議会」と連携していた団体が事例A、C、D、今後連携しようと考えている団体が事例Eなどであった。

また、事例Bでは、「観光協会に加入し、情報収集をしている。」、や事例C、Dでは「市民活動センター、ネットワークセンター」、事例Hでは「市民交流センター」など地域の社会資源をうまく活用して活動をしていた。

また、事例Fにおいては「地域の民間の介護保険サービス事業者」、事例Gにおいては「学区内の医師」など、地域の専門職集団や専門家などの社会資源を活用し、活動内容の質を上げる工夫が見られた。

６．その他（表１）

ほかに、今後の活動内容の希望として、事例BとCにおいて、「飲み会がしたい。」という発言が共通してみられた。事例Gについては、すでに「飲み会をして活動の反省会を行っている。」とのことであった。

また、事例B以外は、「活動のなかで、お茶や茶菓子を囲んで話をする活動」をされていたり、「料理教室を開催される」など、

食を通じた関わりをしている団体が多数あったことも特徴的であった。

ほかに、事例DやEおよびHなどでは、他地域からの転入者が複数おり、「話がはずんで活動に来るのが楽しみ、居場所になっている」というような発言が聞かれたことも特徴的であった。

さらに、事例Bにおいては、「同じことを目指していろんなことを皆で分担してやるので、絆が深まっている。」という発言や事例Cにおいては、「一人でできないことだからこそ、目的や価値観が同じ人が集まり、皆でやっている。」、事例Eでは「やりたいことをわきあいあいとやっている。」事例Gでは「地域の人がやりたいことを会で企画している。」「医者が地域の人を集めて話をしたいという気持ちをこの会を通じて実現している。」など、個人のみならず地域のやりたいという気持ちが活動の出発点にあるような団体が多かった。また、それを皆で共有している状況であった。

D．考察

1．信頼について

信頼の醸成について、特に活動以外の場でも関係性が構築された事例AとFに共通する点をこととしては、歩いて行ける範囲の場での活動であり、これまで「ご近所さん」だった関係が、活動を通じて、信頼の強化や信頼関係の構築につながり、活動以外の場所での助け合いなどに繋がっていた。

また、事例A，FおよびHのいずれも、市が広めた体操や、サロン活動などを合わせて行うというような活動内容であり、地域で必要性が理解され、このような活動を住民が主体的に始めていくと、信頼関係を深めたり、助け合い意識を高めることができることが示唆された。

2．互酬性について

事例C，D，Eについての発言から、団体の主導者は色々な情報や特技およびスキルを持っており、また、主導者以外もそれぞれが情報や特技などを様々持っており、活動のなかでうまく発揮している状況であった。また、それが、個人としてのやりがいや生きがいにつながっていた。

さらに、その団体の活動について、地域でも認知が広まったり、地域住民の参加者を多く得たりするなど、団体以外の人も巻き込むような展開があると、取組に対して、参加者のやりがいや生きがいにつながっている、そのような評価を地域から得ているというような発言があった。

このようなことから、それぞれの活動は、個人の健康づくりや介護予防につながるのみならず、参加者相互の存在に対する尊重や感謝につながることや、参加者自らのやりがいや生きがいにつながっていることが示唆された。

3．規範について

規範については、ほとんどの団体で堅苦しい決まりごとはなく、常識の範囲内で運営しているという結果であった。また、「和」というキーワードが三団体の発言から共通して聞かれたことも、大変興味深い。

詳細な決まりごとを作ることで、かえってルール違反などが出てきて運営がうまくいかなくなることがあることへの懸念があるためか、特に決まりごとがなくても問題がないのかまでは聞けていないが、少なくとも優良事例においては、皆が常識的な行動をとることや和を重んじて参加することにより、事業がうまく進められていた。

事例FやHの事例でもあったが、これに

反するようなことがあった時には、不参加者が出てくるなど、すぐに問題が発生してしまう状況であり、例えば、規則等により決まり事が決められている職場等においては、このようにすぐに問題が表面化するようなことは少ないことから、地域保健事業を推進するうえで、常識的なルールを守ることや調和のある行動をとることは、大変重要な事柄であると示唆された。

また、詳細な規範について決めている団体はなかったものの、一定の役割については、すべての団体で責任者や会計担当を設けている状況であり、このあたりの役割分担についても、活動をうまく継続させるための事項であると考えられる。

４．連携について

連携については、すべての団体で「行政」と連携している状況であった。

なかには、市や県で養成した方々を中心に、地域のために結成された団体もあり、行政の働きかけにより、うまくソーシャルキャピタルが醸成された団体を確認することができた。

それぞれの団体と行政との連携方法については、様々なかたちの支援であったが、ソーシャルキャピタルを醸成するためには、活動や研修の機会を提供したり、広報や補助金などの情報提供が必要かどうかを見守りながら、活動が継続してすすめられるような支援が必要と高橋氏が述べるように[1)]、ソーシャルキャピタルがうまく醸成されている団体においては、行政がうまく支援していた。

すべての事例で行政が関与しているということは、反対に言うと、ソーシャルキャピタル醸成には、行政が関与する必要性が高いことを示唆しているのではないかと考える。

このように考えると、次に連携先として多かった社会福祉協議会についてもソーシャルキャピタル醸成について大きな役割を果たしているのではと考える。

また、どの団体も連携先が複数あり、連携先が多ければ多いほど、団体にとって有用な情報が入ったり、活動の質が向上するのではないかと考えられる。

５．その他

ほかに特筆したいこととして、事例Ｂ，ＣおよびＧなど、男性が多く参加されている団体においては、「飲み会」についての需要が高かった。勤労時代に、飲み会で人間関係を培った男性だからこその発言であるのではと考えられるとともに、様々な行政における事業において男性参加者が少ないという課題に対する対策のヒントになるのではと考える。もちろん、公費で飲み会をするという趣旨ではない。

また、事例Ｂ以外のすべての団体で、食を通じた関わりをしている団体であり、なかには主催者が、あえて「食」を囲むことで参加者の関係づくりを意図している事例もあるように、会議のような形態でなく、「食」を囲むことで信頼関係が強化されたり、結果的にソーシャルキャピタルの醸成につながるための大きな要因となることが示唆される。

さらに、転入者が複数いた事例Ｄ，ＥおよびＨのうち、ＤおよびＥについては、比較的広い範囲で活動されている事例であり、転入してきて地域のことがよくわからないときに、自分の趣旨に合った活動にうまく出会うことで、その後も活動の場が、自分にとって頼れる居場所となっていたことから、このように、転入して不安なときに、

地域としての受け皿となるような場の創設も今後必要なのではないかと考える。

社会人を対象とした研修会やボランティア、ＮＰＯのネットワーク、会議、合同イベントなどはソーシャルキャピタルを蓄積するしくみであり、ネットワークが構築されることで相互の向上につながっていくものである[1)]と矢吹氏が言われるように、事例ＤおよびＥなどは、このようなしくみが地域にあったことにより、ソーシャルキャピタルがうまく醸成した事例であった。

さらに、優良事例で共通していたのは、個人や団体、地域などの「やりたいこと」がうまく事業内容として実施されていた点である。

「やりたい」という気持ちが第一にあり、それが団体の機動力になるとともに、個人がその団体という資源をうまく活用し、結果的に個人のやりがいにもつなげられることで、活動がうまく継続されていた。

このように、優良団体においては、「やりたい」というエネルギーがうまく融合、結成されていた。当たり前のようなことであるが、これもソーシャルキャピタル醸成の大きな要因となるのではないだろうか。

矢吹氏は、行政は、自助機能を高めるために、機会の保障や提供を求められ、住民は情報を得るためのアンテナを張り、意欲を持っていることがそれぞれの役割となると述べている[1)]。

このようなことを考慮すると、公募型で助成事業者を募り実施した介護予防推進交付金事業について、まず、各団体の「やりたい」という出発点から、事業を募集した点を鑑みると、実施事業のほとんどがソーシャルキャピタルの醸成につながる事業となっているのではないかと考えられる。

県としては介護予防を目的に実施しているものであるが、ソーシャルキャピタルを醸成させる取組の推進としても事業を実施している意義があり、事業の大きな副産物となった。

Ｅ．結論

ソーシャルキャピタルが活用または醸成される事業・活動の特徴としては、歩いて行ける範囲での場の活動については、活動以外の場においても信頼関係や助け合い意識を高めることができることにつながることが示唆され、反対に、比較的広い範囲での活動については、参加する参加者の満足度が高く、特に転入者にとっては、良い受け皿となっていることが示唆された。

また、優良事例では、活動が個人の健康づくりや介護予防につながるだけでなく、参加者自らのやりがいや生きがいにまでつながっていることが特徴であった。

ほかに、活動を行ううえで、一定の役割分担をしながら、皆が常識や和を重んじて参加することにより、事業がうまく進められていたことや、行政や社会福祉協議会などの関与があったり、連携先を増やすことで、活動の質向上がされていることも優良事例の特徴であった。

さらに、食を通じた活動を行うこともソーシャルキャピタル醸成の要因としてのひとつになることが示唆された。

そして何より、個人や団体の「やりたい」という希望やエネルギーが団体を発足させたり、活動を継続させていることから、このような希望について、行政をはじめ、さまざまなところがうまく拾い上げ、キーマンを見つけ出し、事業化することでソーシャルキャピタルが醸成され、ひいては、地

域の健康や福祉の向上につながるのではないだろうか。

F．参考・引用文献

［引用文献］

１）社会福祉法人　東北福祉会　認知症介護研究・研修仙台センター：地域包括支援センターにおける地域づくりとソーシャルキャピタル．平成２３年３月．

［参考文献］

１）社会福祉法人　東北福祉会　認知症介護研究・研修仙台センター：地域包括支援センターにおける地域づくりとソーシャルキャピタル．平成２３年３月．
２）厚生労働省：地域保健対策の推進に関する基本的な指針．平成２４年７月．
３）一般財団法人　日本公衆衛生協会：健康づくりにおけるソーシャル・キャピタルの育成等に関する保健所の役割に関する調査研究報告書．平成２５年３月．
４）兵庫県健康福祉部社会福祉局高齢社会課：これからの介護予防の推進について．平成２５年３月．

※１　レイカディア大学

　滋賀県レイカディア大学は、高齢者の社会参加意欲の高まりに応え、高齢者が新しい知識、教養と技術を身につけ、地域の担い手として登場できるよう支援している場。

G．研究発表

　なし

H．知的所有権の取得状況

　なし

[研究協力者]
嶋村清志、黒橋真奈美、中村ひとみ、小幡鈴佳、園田由美子（滋賀県健康福祉部）

表１滋賀県におけるソーシャルキャピタルを活用した公募型介護予防事業の優良事例に関する研究　事例概要とインタビュー内容の共通事項

			事例Ａ	事例Ｂ	事例Ｃ	事例Ｄ	事例Ｅ	事例Ｆ	事例Ｇ	事例Ｈ
グループ（団体）の概要		団体の人数	スタッフ約５０名	スタッフ約１０名	スタッフ約１０名	スタッフ約１５名	約１５名	スタッフ約１０名	スタッフ約７０名	スタッフ約１０名
		事業参加者を含めた団体の人数	約８０名	約６０名	約１００名	約１３０名	約３００名	約１５０人	約２００名	約４０名
		活動の内容	サロン活動や週に１回の体操教室、子どもへの読み聞かせ、スクールガード活動などを実施。	介護予防の一環として、曳山の継承活動等を通じて、地域参加の場を増やしている。	「かじや館」において、パソコン教室のほかに、寄せ植え教室、木工教室、料理教室などの高齢者の通う場を提供。	クラブ内メンバーが作成した「私と家族のあんしん手帳」を活用して、勉強会を開催。	そば打ちや菓子作りなど、親子で楽しめるイベント等の開催等を通じて、自らの介護予防とともにまちづくりにも貢献している。	サロン活動や体操教室などを法人の公益活動として行っている。	ボランティアによる会食会や学区内のシニア家庭の庭に菊を植える活動を通じて、介護予防の取組を進めている。	サロン活動や週に１回の体操教室などを実施。
		活動の頻度	週１回	月２回	月２～３回	週１回	月１～２回	週１回	月１回程度	週１回程度
		事業開始年月	平成２０年４月～	平成２０年４月～	平成１８年６月～	平成２１年３月～	平成１５年４月～	平成１９年４月～	平成２４年１１月～	平成２４年７月～
		活動範囲	自治会の範囲	自治会の範囲	市全域	県内全域	市全域	小学校区	小学校区	自治会の範囲
インタビュー内容から抽出された共通事項	信頼	活動の場以外での関わりがある	○					○		○
		活動場所が徒歩や自転車で通える範囲である	○					○		○
		市の広めた体操を行っている	○					○		○
	互酬性	メンバーの特技やネットワークを頼りにしている			○	○	○			
		メンバーが活動にやりがいを感じている			○	○	○			
		地域住民の参加がある		○	○	○	○	○	○	
		地域からの存在の意義を感じる		○		○	○	○	○	
	規範	詳細な決まり事がない	○		○	○	○	○		○
		和を大事にしている	○				○		○	
		トラブル経験あり						○		○
		責任をもつ人を明確にしている	○	○	○					
		会計が重要という認識がある		○	○		○	○	○	
	連携	行政と連携している	○	○	○	○	○	○	○	○
		社会福祉協議会と連携している	○		○	○	○		○	
		他団体等と連携している	○	○	○	○	○	○	○	○
	その他	飲み会がしたい（している）		○	○				○	
		多くの男性の参加がある		○	○		○		○	
		活動の中で食事などがある	○		○	○	○	○	○	○
		メンバーに転入者がいる				○	○			○
		皆で同じことを目指している		○	○		○		○	